

## 参考資料 教育と学習

### 1 教授論におけるキー概念

**学習**： 知識、認識、資格、動機を獲得すること。学習概念は教授論にとって根本的意味をもつ。けれども価値的・内容的には中立であり、何が重要で、なにが重要でないかの基準を与えない。

**訓練**： 「スキル」、すなわち道具的で操作化可能な能力や（運動的）熟達を練習すること。教育はスキル抜きに考えられないが、だからといって全てのスキルが教育の構成部分であるわけではない。

**相談**： 助言を求める人の日常生活上の問題に関しての決定を助言者が援助すること。相談は学習過程を作動させることがある。とはいえ、学習を至上目的とするものではない。

**心理療法**： 「クライアント」の心理的および精神身体医学的な障害や苦悩を緩和し癒すための（たいていは対話による）介入行為で、多くの場合にクライアントの感情や生育体験を話題にしておこなわれる。（しかしながら、「健全」と「病氣」との区別はますます困難になってきている。）

**資格付け/熟達化 (Qualifizierung)**： 外的な、例えば職業上の課題や活動のための遂行能力を精神活動スキルの伝達によって与えること。とはいえ、鍵となる能力（たとえばコミュニケーション--訳者補）の熟達化や道徳規範の方向付けに関する熟達化もある。「熟達化」とは何かは、社会の要請、つまり主体の「教育」という観点から定義される。

**教育 (Bildung)**： 人間が、実行力と責任感を兼ね備えて行動できることを目標にしつつ、自己ならびに環境と対話（対決）すること。教育とは現実を構成することであり、知識や熟達化の伝達と獲得を超えたものである。同時に、教育は自己啓蒙でもあり、それゆえ療法効果をも有し得る。教育という状況において、参加者は共通のテーマや学習目標に順応しつつも、例えば個人的な相談願望を背後に隠しているのである。

Siebert, Horst Didaktisches Handeln in der Erwachsenenbildung. Didaktik aus konstruktivistischer Sicht. 4. Auflage. Luchterhand, Muenchen 2003. S.13f.

### 2 齟齬体験（イライラ）への対応範例（学習はイライラ経験から始まる）

	齟齬体験	対立項	社会的役割	活動
救済 Help	困窮、自立性喪失 過剰要求	自立—依存	援助者— クライアント	支え+ 介護をする
治療 Therapy	機能不全	健康—病氣	治療者—患者	再生 回復
安全保障 Security	管理不能	秩序—無秩序	主人—従者	管理する
使命遂行 Mission	過った方向性 方向性喪失	洞察—無分別	モデル— 受容者	確信する 覚醒する
判決 Judge	紛争	正義—不正	（仲裁）判事— 当事者	判決過程
資格付け Qualification	無能力	正解—誤謬	教師—生徒	指導して伝達する
教育 Bildung	不確実	知—無知	ファシリテーター 学習相談者	認知的構造化を支援する 随伴

Ortfried Schaffter

1 知識の量的拡大としての学習	4 抽象的な意味の形成としての学習
2 記憶としての学習	5 現実の様々な解釈、理解としての学習
3 遂行できる事実、能力、方法の獲得としての学習	

Alan Rogers: Non-Formal Education: Flexible schooling or participatory education?